

# 夕顔卷 (帚木三帖の一帖として) における光源氏の体験

望月郁子

## 内容

### 一 光源氏の本性

1 夕顔卷の冒頭 2 結果としてのストイック性の強要 3 某院における急場での光の対応と処理―ゴシップ化回避  
4 遺骸の手を取って別れを惜しむ 5 空蟬・軒端菝とのその後―自信過剰な奢り

### 二 前後の巻との繋がり

### 三 夕顔卷の巻末の結文

付 夕顔に添う女の正体と玉鬘巻における乳母の夢との繋がり

1 問題の所在 2 夕顔の物怖じ 3 夕顔の体験―せむ方なく思し怖ぢ― 4 夕顔死後なお夕顔に付き添う女  
5 夕顔の生き方―刹那を生きる女

この小論は、帚木・空蟬・夕顔三帖を一括りのものとして、桐壺卷に直続し、若紫卷に先行する三帖と位置付け、源氏物語の、若い主人公光源氏の、臣下の世界における体験を確かめようとする作業の一環<sup>①</sup>であり、光源氏を軸に検討考察するものである。

一 光源氏の本性

「二一」(夕顔巻の冒頭) 夕顔巻の冒頭は、

「六条わたりの御忍び歩きのところ、内裏よりまかだたまふ中宿りに、大式の乳母のいたくわづらひて厄になりにけるとぶらはむとて、五条わたりの家たづねておはしたり。(二三五)」

と、新しい情報―六条わたりの忍び歩きと、光の乳母と乳母子惟光の登場―から始まる。先行の巻の継承を強調する帚木巻・空蟬巻に対して、新しさが優先され、単調が回避されている。場所は下京の五条・六条である。

重病の乳母を、子の惟光には報せず、五条の家を探して見舞う光の心が、結果的に、夕顔の花咲く隣の小家に隠れ住む女(夕顔)との出会いとなる。

隨身が光に求められて手折った夕顔の花一房を、隣家はこれに花を置いて…と扇を差し出した。その扇は、「もて馴らしたる移り香いとしみ深うなつかしくて」、「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」と書かれていた。光は「そこはかとなく書きまぎらはしたるもあてはかに(品モママアデアリ)ゆゑづきたれば(一流ノ教養ニ近イレベルノ高サガアルノデ)、いと思ひのほかにかしうおぼえたま(二三九―一四〇)」い、畳紙に返歌をしたため隨身にとどけさせた。光に隣家の情報収集を依頼された惟光の垣間見の報告を受け、

「かの下が下と人(頭中将)の思ひ捨てし住まひなれど、その中にも、思ひのほかにか口惜しからぬを見つけたらばと、めづらしく思ほすなりけり。(一四四)」

と、光の意識には、雨夜の品定めにおける頭中将の小品への興味と左馬頭のへめづらしさ論Vが蘇っており、興味は「下品下生」の住まいに隠れ住む意外な女性に向いている。

続いて、物語は、空蟬の夫伊予介の上京を語り、光に「左馬頭の諫め」を思い出させ（段落「六」）、帚木卷・空蟬巻との繋がりを緊密にする一方、この巻で新登場した「六条わたり」の語りを挿入させ（段落「七」）、再び夕顔に戻り、以下話題を光の夕顔との交渉に絞る。ちなみに、六条邸は「上品上生」の邸である。六条邸の人々に慕われながら、「下品下生」の住まいに身を隠し住む女性に強く惹かれる光の心が強調されている。

「12」（結果としてのストイック性の強要）夕顔に対する光の意識は、雨夜の品定めでの頭中将の「しれもの」ではないかとの疑問と、夕顔の歌に始まったその人の魅力とが絡み合っている。惟光から、隣家の前を頭中将が車で通り過ぎた時、隣家の童が頭中将の隨身・その小舎人童の名をはっきり言ったと知らされた光は、「もしかのあはれにわすれざりし人」にや（一五〇）」と自信を強め、惟光の手引きで、忍びの通いを始めた。以後の光の気持ちの変化は、

「…今朝のほど昼間の隔てもおぼつかなく（一二五）」

「人目を思して隔ておきたまふ夜な夜などは、いと忍びがたく苦しきまで思ほえたまへば、なほ誰となくて二条院に迎へてん、…いとかく人にしむことはなきを…（一五四）」

と、今まで体験したことがない程、燃えている。

「なほかの頭中将の常夏疑はしく、語りし心ざままづ思ひ出でられたまへど、忍ぶるやうこそはと、あながちにも問ひ出でたまはず。（一五五）」

と、相互の名乗り合いは控えている。

「人のけはひ、いとあさましくやはらかにおほどきて（オットリシテイテ、育チノヨサガ感ジラレ）、もの深く重き方はおくれて、ひたぶるに若びたるものから、世をまだ知らぬにもあらず、いとやむごとなききはにはあるまじ、いづこにいとかうしもとまる心ぞとかへすがへす思す。（一五三）」

光が知る女性、葵上とも、空蟬とも全く違う。光に対する反応が「やはらかにおほどきて」と、拒否はせず柔らかであるが、いい気にならず、適当に距離は置く。光は引き付けられて、会わずには居れない。

光は「いざ、いと心やすき所にて、のどかに聞こえん（一五四）」と、五条の家を出たがらない夕顔を、女房右近を供に、誘い出し、某の院に来たのであったが、「宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに（一六四）」枕元に不思議な女が現れ、夕顔は絶命する。

対空蟬では、光が接近すると、空蟬は△尋木▽のごとく姿を消し、あるいは小桂を残して△空蟬▽となって光を拒否し通した。それに続くのが、光がこれこそと燃えていた最中での、女性（夕顔）の△死▽という、取り返しのつかない深刻な体験である。結果的に言えば、空蟬相手にも、夕顔相手にも、光は性的欲求を満たすに至れない。世間にさらに無い体験を踏まえての、苦しいストイックを余儀なくされる。

「一三」（某院における急場での、光の対応と処置―ゴシップ化回避―）「宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに（一六四）」光の枕上に△をかしげなる女▽が座って、「この御かたはらなる人をかき起こさむとす」と夢うつつに見て、光が体を起こすと同時に灯が消えた。暗がりの中、光は、「太刀を引き抜きてうち置」き、魔除けとする。右近を起こし、「渡殿なる宿直人起こして、紙燭さして参れと言へ」と命じる。光は沈着で冷静である。暗がりを恐れて右近は動かない。手を敲いて人を求めるがこだまがかえるのみ。暗がりの中で、「この女君いみじくわななきまどひて、いかさまにせむと思へり。汗もしとどになりて、我かの気色なり。（一六四）」暗がりを恐がっていると思う光は、右近を女君に付き添わせて、部屋を出、人を起こし、灯を求めた。「この院の預かりの子」の他には、光の従者の「上童ひとり、例の隨身」がいるのみである。「隨身も弦打して絶えず声づくれと仰せよ」と屋敷の中の魔除けをさせる。預かりの子は滝口の武士であり、「弓弦いとつきづきしくうち鳴らし」た。部屋には光の護身の抜き身の太刀が置いてある。外部では弦打を任務の一つとする

男が弓弦を鳴らしている。光は打てる手を打っている。しかし、暗がりの中、部屋に帰ると、女君も、付き添わせてあった右近も、うつ臥している。「…まるあれば、さやうのものにはおどされじ」といって、右近を引き起こし、女君を「かい探りたまふに（女君は）息もせず。」である。

預かりの子が「紙燭」を持ってきた。遠慮してなかなか入ってこないのを、遠慮は無用と命じて近くまで持ってこさせ、光が、灯に映される周囲を見ると、「ただこの枕上に夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。（一六七）」不思議な女は部屋の灯が消えていた間そのまま部屋に居たらしい。光源氏の護身の抜き身の太刀も、滝口の武士と隨身との弦打も、この女には魔除けとしての効き目は無かったらしい。

光は「まづ、この人いかになりぬるぞと思ほす心騒ぎに、身の上も知られたまはず添ひ臥して、「やや」とおどろかしたまへど、ただ冷えに冷え入りて、息はとく絶えはてにけり。言はむ方なし。」女君絶命と知った右近が声を上げて泣くのを、静かにと注意する。

預かりの子（滝口）を召して、「ここに、いとあやしう、物に襲はれたる人のなやましげなるを（急ニ気分ノ悪クナツタ人ガイルノダ）」と、事態を伏せて知らせ、惟光に急遽来るように言え、某阿闍梨がいればそれもくるようにと命じ、「かの尼君などの聞かむに、おどろおどろしく言うな。…」と注意する。若い光は事のゴシップ化を警戒している。打てる手を打った後、光はさすがに「おほかたのむくむくしき譬へん方なし。（一六八）」と、恐怖感に襲われる。聞こえるものは荒い風、松の響き、鳥の鳴き声のみで待つ人声はなく、部屋の中は灯が足りず、物陰はどこも暗く「物の足音ひしひしと踏みならしつ背後より寄り来る心地す。（一六九）」やと「鶏の声」がするが、惟光は来ない。光の心中を物語は次のごとく語る。

「命をかけて、何の契りにかかる目を見るらむ、わが心ながら、かかる筋におほけなくあるまじき心の報いに、かく来し

方行く先の例となりぬべきことはあるなめり、忍ぶとも世にあること隠れなくて、内裏に聞こしめさむをはじめて、人の思ひ言はんこと、よからぬ童べの口ずさびになるべきなめり、ありありて、をこがましき名をとるべきかな、と思しめぐらす。(一六九〜一七〇)」

「かかる筋におほけなくあるまじき心」を「藤壺の宮への思慕をさす」と解釈されているが、夕顔を連れて某院に入った夕暮に、光が第一に気にしたのは、「内裏にいかにも求めさせたまふらんを」(八月十五夜ニ続く宮中デノ管弦ノ宴ニ光ガ参加シナイノダカラ、今頃桐壺帝ガドンナニカ光ヲ探シテオイデダロウ、ソウニ決マツテイル)と桐壺帝へのお勤めのサボリであり、ついで「六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、…(一六三)」と六条が気になっている。<sup>(3)</sup>「おほけなくあるまじき心」とは、帝へのお仕えよりも夕顔の女との交際を優先していることをいうと見なければならぬ。光にとって父桐壺帝は絶対的存在であり、父帝の御心に従っていないことへの後悔である。夕顔を死なせてしまった今、まず恐れるのはゴシップが父帝のお耳に入ることである。それを恐れながら、父帝に護られてという意識が、この場の若い光を支えている。

やっと惟光が来る。「この人に息をのべたまひてぞ、悲しきことも思されける、とばかり、いといたくえもとどめず泣きたまふ。(一七〇)」「おのれもよよと泣き(一七一)」ながら惟光は、外聞を封じて、自分一人の責任で事後処理にあたり、光を護る。

「14」(遺骸の手を取って別れを惜しむ)夕顔の突然の死は、死者に対し光が何をどうするか、光の決断と対応・行動の取捨選択、光の女性に対する人間性テストの本番を出現させた。

光が頼れるのは惟光のみである。惟光の采配で遺体を「東山の辺に移」すとなり、「明けはなるほどの紛れに、御車寄す。」

「この人をえ抱きたまふまじければ、上蓆に押しくくみて、惟光乗せたてまつる。いとささやかにて、疎ましげもなくらうたげなり。したたかにしもえせねば、髪はこぼれ出でたるも、目くれまどひてあさましう悲しと思せば、なりはてんさまを見むと思せど（一七二）」

生命力の象徴である長い髪が生きているかのよう、光の目の前にこぼれ出る。付き添いたかったが、光は、惟光の指示に従って、人目につかないように馬で二条院へ帰る。遺体には右近が乗り添い、惟光は徒歩で付き添った。日が暮れて、二条院に帰ってきた惟光に、

「…浮かびたる心のすさびに人をいたづらになしつるかごと負ひぬべきが、いとからきなり。（一七六）」  
と、事の全部を自分の責任とする光は後悔と苦しさをぶつけ、

「…いま一たびかの亡骸を見ざらむがいといぶせかるべきを、馬にてもせん（一七七）」と言い、  
「なほ悲しさのやる方なく、ただ今の骸を見では、またいつの世にかありし容貌をも見むと思し念じて、例の大夫、隨身を具して出でたまふ。（一七八）」

「入りたまへれば、灯とり背けて、右近は屏風隔てて臥したり。（夕顔が）いかにわびしからんと見たまふ。恐ろしきけもおぼえず、いとらうたげなるさまして、まだいささか変りたるところなし。手をとらへて、「我にいま一たび声をだに聞かせたまへ。いかなる昔の契りにかありけん、しばしのほどに心を尽くしてあはれに思ほえしを、うち棄ててまどはしたまふがいみじきこと」と声も惜しまず泣きたまふこと限りなし。（一七九）」

光は、遺骸の手を取り、死者に直接語りかけ、声をあげて泣く。死の忌みなど考えるゆとりもない。

「ありしながらうち臥したりつるさま、うちかはしたまへりしが、わが御紅の御衣の着られたりつるなど、いかなりけん契りにかと（帰りの）道すがら思さる。（一八〇）」

憔悴しまった光は加茂川のほとりで馬から落ち、惟光が清水の観音を念じ、「君も…心の中に仏を念じ」て、やっと二条院に帰り付く。

光はそのまま寝込んで二十日余り重態が続いた。九月二十日頃に至り全快した。

右近相手に、故人の素性、頭中将との関係、五条に身を隠す理由などを聞き出し、遺児を引き取る意志を右近に示し、光の求める女性像を

「女は、ただやはらかに、とりはづして人に欺かれぬべきがさすがにものづつみし、見む人の心には従はんむあはれにて、わが心のままにとり直して見んに、なつかしくおぼゆべき（一八八）」

と語る。（夕顔を偲んで語るこの理想の女性像は、左馬頭の女性論を踏まえたものであり、殆どそのまま若紫巻に引き継がれる。）

四十九日には、人目を避けて、比叡の法華堂で丁寧<sup>に</sup>に供養をした。阿弥陀仏に救いを祈る願文は光自身が書いた。しかし、法事の翌日の夜、光の夢に現れた夕顔は、

「かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも（某院で見たのと）同じやうにて（一九四）」  
であった。往生どころではない。

「二五」（空蟬・軒端菰とのその後―自信過剰な奢り―）空蟬は、光の夕顔との交渉を知るはずもないが、「かくわづらひたまふを聞きて、さすがにうち泣きけり。（一八九）」と、自責の念に駆られて、

「うけたまはりなやむを、言に出でてはえこそ、

問はぬをもなどかと問はでほどふるにいかばかりかは思ひ乱るる

益田はまことになむ（一八九―一九〇）」



と見舞いの歌をおくる。光は、「めづらしきに、これもあはれ忘れたまはず、

「生けるかひなきや、誰が言はましごとにか、

うつせみの世はうきものと知りにしをまた言の葉にかかる命よ

はかなしや」と、御手もうちわななかるるに、乱れ書きたまへる（一九〇）」

それを空蟬は「いとどうつくしげなり。」と子供扱いし、「なほかのもぬけを忘れたまはぬを、いとほしうもをかしうもおもひけり。」といい気なものである。亡き夕顔を恋い慕う光の本音など思いも寄らない。光を見事に突放し続けてきた空蟬の、自信過剰故の敗北・甘さを物語は突いている。

一方、軒端菝を思い出した光は、夫の蔵人少将を意識し、彼女を犯したのが光と彼に判らせた気になり、小君を介して軒端菝に歌をおくる。文は少将の不在中に女の手へ渡った。彼女の返歌を初めて手にし、字の下手さ品のなさを知るが、垣間見に続いた彼女の豊かな肉体の記憶をよみがえらせ、「憎からず」となる光である。物語は、少将の目に止まるように意識して文を「高やかなる菝につけて（一九一）」「少将も見つけて、我なりけりと思ひあはせば、さりとも罪ゆるしてんと、思ふ（光の）御心おごりぞあいなかりける。」と、光に潜む男の本性をあばかずにはおかない。

「伊予介、神無月の朔日ごろに（北の方を伴って）下る。…手向け心ことにせさせたまふ。…かの小桂も遣はず。（空蟬返歌）…今日ぞ、冬立つ日なりけるもしるく、うちしぐれて…

過ぎにしもけふ別るるも二道に行く方知らぬ秋の暮れかな

なほかく人知れぬことは苦しかりけりと思し知りぬらむかし。（一九五）」

夕顔は死に、空蟬は京を離れ、光は独りとり残されて、秋が暮れる。満たされない、忍びの恋の苦しさを光は独りかみし

める。

夕顔巻が、前二巻から続く空蟬の語りを含め、結文を残して、ここで閉じられる。

## 二 前後の巻との繋がり

帚木巻は帚木巻だけで完結しているのではない。帚木巻・空蟬巻・夕顔巻の三帖で大きく括られており、軸をなすのは、若い人ただ一人、光の忍びの恋の語りである。以上の検討考察の範囲で、筆者に明らかにされたのは、執筆順序ではない。当該三帖が桐壺巻と若紫巻とを繋ぐ巻々として凝りに凝った三帖であることである。光にストイックを余儀なくして苦しめる語りは、率直に言えばえげつなさを如何ともしがたいが、後に光が、新手枕における紫の自我の主張を受け入れるため、必要不可欠の下地固めとなっている。内容本位に見れば、桐壺巻執筆後、当該三帖がこの順序で執筆され、若紫巻に続いたと見るのが自然である。

## 三 夕顔巻の巻末の結文

夕顔巻の巻末には、次の結文がある。

「かやうのくだくだしきことは、あながちに隠るへ忍びたまひしもいとほしくてみなもらしとどめたるを、など帝の皇子ならんからに、見ん人さへかたほならずものほめがちなると、作り事めきてとりなすものしたまひければなん。あまりの言ひさがなき罪避りどころなく。(一九五―一九六)」  
である。

小学館 新編日本古典文学全集『源氏物語1』の帚木巻頭の頭注に、

「巻頭から次ページ」うちまじりける」まで語り手の前口上。後の夕顔巻末の結びの言葉と照応し、帚木・空蟬・夕顔三帖が、光源氏伝拾遺としてまとまっていることを示す。：(五三三)」

とあり、夕顔巻末の頭注一七に、

「以下の語り手の結文は、帚木巻頭の序に照応。帚木・空蟬・夕顔の三帖で、一まとまりの中の品の女の物語をなしていることを明示する。(一九五―一九六)」とある。

筆者は、帚木冒頭を

a 「光源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすき事どもを末の世にも聞きつたへて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろひごとをさへ語りつたへけん人のもの言ひさがなさよ。」

b 「さるは(実は)」以下、「うちまじりける」まで

に区別し、aは女房社会を中心として独り歩きをする無責任なゴシップであり、具体例に、紀伊守邸での女房達の話にのぼった「式部卿宮の姫君に朝顔たてまつりたまひし歌などを頼歪めて語る(帚木九五)」があるが、より多くの人々の興味共感を惹き、通俗的な△色光源氏の恋愛▽に流れるのに対し、bは光源氏の実であり、「なよびかにをかしきことはなく、交野の少将には、笑はれたまひけむかし」という内実であって、a bは虚実対立する語りであると解釈する。<sup>(4)</sup>これは同時に、源氏物語の語りにはa bが共存しており、読者次第でa b多様な読みが可能となる可能性を示唆する。

夕顔巻末の結文を素直に読めば、光の空蟬・夕顔との交渉の語りは、語り手が自分の責任で始めて語ったことを明示した文であり、a系の語りではない。

として問題は、語りの責任を明示するのが、なぜ空蟬物語・夕顔物語の語り手に限定されなければならないのかとなる。最も単純にいえば、中の品である空蟬相手の光の描かれ方、特に小君との関わりにまで及ぶ部分は、若い貴公子に対する

遠慮会釈のなさもひど過ぎる。新手枕における紫の要求に対応するための伏線・試練とするにしても、どぎつ過ぎると感じるのが大方の読者であろう。当該の結文は、それに対する語り手の開き直りと、取りたくもなる。しかし、物語は、そんな甘えは受け付けるはずもあるまい。

更に、結文とか前口上とかを求めると、竹河巻の冒頭には前口上として、

「これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末々にひが事どものまじりて聞こゆるは、我よりも年の数つもりほけたる人のひが言にや」などあやしがりける、いづれかはまことならむ。(竹河五九)」

がある。夕顔巻の結文もそうであるが、これも、玉鬘系の物語の語り手による語り手の責任の明記である。

夕顔巻末で、空蟬は京を離れる。夕顔は死に、忘れ形見は行方不明である。光源氏により、二条東院に引き取られる以前の空蟬・六条院に迎えられる以前の夕顔の忘れ形見、つまり、伊予・常陸から、或いは筑紫から、京に戻り、光源氏の保護下に入る以前の空蟬・夕顔の忘れ形見の語りは、在京の女房、特に紫上付きの女房には語れまい。結文の目的が語りの内容の信憑性に語り手が責任を持つことの明示にあるとすれば、夕顔巻の結文は、空蟬物語も夕顔物語も夕顔巻で終わるのではない。この先の語りにも責任を持つという意思表示の役割を担っているのではないか。

大体、帚木巻で語られた雨夜の品定め体験談における頭中将の△痴者▽の語りの結末が夕顔の巻の当該の語りである。その意味で、帚木巻から夕顔巻の終わりまでが、大きく一括りの語りをなしている。しかし、夕顔の話は、それだけでは終わらない。光について言えば、夕顔の死に責任を負うのを代償として、頭中将の娘である夕顔の遺児(玉鬘)を、右近を介して六条院へ迎え、臣下の理想の姫君として養育できる道がおのずと開けてくる(玉鬘十帖)。一方、光の△下品下生▽の住まいへの関心は、皇統の血筋のそれである末摘花物語に繋がっていく。更に、夕顔を死に至らしめた犯人につ

いては、実は、玉鬘巻の乳母の意識（九〇～九一）が解明の鍵を握っている可能性がある。

一つの巻の中でこと終われりとせず、先に先にと繋がりを延ばし広げるのが、源氏物語における、長編物語を語る上で重要な方法であるらしい。帚木巻を語る時点で夕顔巻が、夕顔巻を語る時点で玉鬘巻が、さらに玉鬘十帖の大梓・竹河巻冒頭の語り手の責任の明示までが、プロットのアウトラインとして成立していた可能性は考慮されてよい。

種明かしに限っても、種を先の先に伏せておくという書き方・方法は、いわゆる紫上系の語りでも同様である。夕顔物語を玉鬘物語に繋げているのが、

「(乳母の) 夢などにいとたまさかに (夕顔が) 見えたまふ時などもあり。同じさまなる女など添ひたまうて見えたまへば…… (玉鬘九〇～九一)」

の夕顔に寄り添う「同じさまなる女」である。そこに至って、夕顔に添う女の正体は改めて追究されなければならない。ちなみに古注における夕顔巻末の結文についての諸説（湖月抄による）は、帚木三帖の範囲内だけしか念頭に置かれていない。

#### 付 夕顔に添う女の正体―玉鬘巻における乳母の夢との繋がり

〔付1〕（問題の所在）夕顔は某の院で、宵が過ぎた頃、枕上に現われた「いとをかしげなる女」により、殺された。

夕顔を殺した女の正体を、光は、「荒れたりし所に棲みけんもの我に見入れけんたよりに、かくなりぬる（夕顔一九四）」と見た。その根拠は、女が某院で、「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ（一六四）」<sup>5</sup>と言ったことに、重ねて、「(四十九日の) 法事したまひてまたの夜、ほのかに、かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも (某院で見たのと) 同じやうに (夢に)

見なければ(一九四)」である。光は加害者の顔を覚えており、夢にあらわれたのも同一と認識できているが、既知の人ではない(六条とは認識していない)。加えて、某院に入って、「け疎くもなりにける所かな。さりとも、鬼なども我をば見ゆるしてん(一六一)」と光自身が鬼を呼び出していたという自覚もあったであろう。光のこの判断に従うのが、現在の大方の見解である。

これに、反証を呈するのが、筑紫に下って後、夕顔の乳母が見た夢である。

「(乳母の)夢などに(夕顔が)いとたまさかに見えたまふ時などもあり。同じさまなる女など添ひたまうて見えたまへば、なごり心地あしく、なやみなどしければ、なほ(夕顔が)世になくなりたまひにけるなめり、と思ひなるもいみじくのみなむ。(玉鬢九〇〜九二)」

本文に「同じさまなる女など添ひ…」がある。玉鬢卷の当該の本文の従来の解釈であるが、小学館 新編日本古典文学全集『源氏物語』上掲本文頭注一四は、本文の「同じさまなる女」を、「夕顔が某院で死んだとき、枕上に立った美貌の女。少式の娘たちは、怪しい女が源氏の夢枕などに立った女とは知るはずがない。この一文は、語り手の言葉。…」とする。夕顔殺害者を「荒れたりし所に棲みけんもの」即ち魔性の存在と見る限り、某院の現場に居なかった乳母達が知るはずがないとなる。

しかし、そう見て済ますのでは、玉鬢卷の本文の理解を放棄することにしかならない。光の解釈は光にだけ通じるものである。「同じさまなる女」の正体が改めて問われなければならない。

この夢を見たのが、乳母だと物語は特定してはいないが、筑紫へ下った大式一行の中で夕顔に対して最も近く、責任を担うべきが乳母であるのは動くまい。「同じさまなる女など添ひたまうて」夕顔が夢に現われると、乳母は、夕顔が死んだと信じる。これは、当該の女が、夕顔を死に至らしめる存在だと乳母が信じていることを示唆する。この本文の「同じさ

まなる女」とは、乳母の記憶に当該の「女」があざやかに焼き付けられていて、消えもかすみもしていないことをいう。光が某院で見た以前に、夕顔の乳母と恐らく夕顔自身とは、別の場所で「同じさまなる女」と出会っていた可能性が大きい。「同じさまなる女」とは、魔性の存在ではありえまい。某院で、魔除けく光の抜き身の太刀・隨身と滝口の武士による弓の弦打ちくが当該の女には効力をもたなかった（前述「13」）。生身の女であり、光と出会う以前に、乳母の前で夕顔が殺されそうになった事件が実在した蓋然性が高い。

玉鬘巻のこの本文は、夕顔を殺した女の正体に接近する手がかりもしくは種明かしとして、蔑ろにされてはならない。

「付2」（夕顔の物怖じ）五条の隠れ家にいる限り夕顔は、特に物怖じはしなかったが、光が隠れ家から外へ誘うと、躊躇し、心細そうな感じになり、恐怖感が強まっていく。本文で確認したい。

光が夕顔を某院に連れ出す際に、夕顔は五条の隠れ家を出るのを警戒していた。

「いざ、いと心やすき所にて、のどかに聞こえん」など語らひたまへば、「なほあやしう。かくのたまへど、世づかぬ御もてなしなれば（名乗ッテイナイノデ）、もの恐ろしくこそあれ（モノニ襲ワレソウナ気がシテ）（一五四）」

「いざ、ただこのわたり近き所にて、心やすくて明かさむ。かくてのみはいと苦しかりけり」とのたまへば、「いかでか（余所へ行クナンテトンデモナイ）。にはかならん（突然デ）」といとおいらかに言ひてゐたり（立ち上ガラス、座ッテイル）。（一五七）」

「（光の歌―優婆塞が行ふ道をしるべにて来む世も深き契りたがふな―に對し夕顔は）前の世の契り知らるる身のうさに行く末かねて頼みがたさよ（今現在ノ我が身ガドウナルカ不安ナノニ、将来ノ頼ミナド）（一五九）」

「いさよふ月にゆくりなくあくがれんことを（五条ノ隠レ家ヲ出ルノヲ）、女は思ひやすらひ（種々考エテコノ家ヲ出タクナイト思イ）（一五九）」

「(某院に着き、門外で待つ間、「簾をさへ上げ」て、光が歌を詠みかける。)女恥ぢらひて、「山の端の心もしらでゆく月  
はうはのそらにて影や絶えなむ(私ハ消エテ無クナリソウ)心細く」とて、(門外デ車ノ簾ヲアゲテイルノヲ)、もの恐  
ろしう(魘ワレソウデ)すごげに(鳥肌ガ立チソウナ)思ひたれば(表情ヲシテイルノデ)(一五九〜一六〇)」  
「たとしへなく静かなる夕の空をながめたまひて、奥の方は暗うものむつかしと(暗ク何が隠レテイルカワカラナイ)  
と、女は思ひたれば、端の簾を上げて添ひ臥したまへり。…つと御かたはらに添ひ暮らして(日ガ暮レルマデ、光ニピッ  
タリ寄り添ッテ)、物をいと恐ろしと思ひたる(襲ワレル予感ガシテイル)さま若う心苦し。格子はとく下ろしたまひて、  
大殿油まゐらせて(一六三)」

夕顔は、奥の暗がりを「ものむつかし」つまり、暗がりに自分を狙う者が潜んでいるような予感がしているらしい。光から  
離れず「物をいと恐ろし」と思っている。オソロシは襲われるような恐怖感をいう。普通の女性と違う、夕顔のこの恐怖感  
の正体が問題である。

〔付3〕(夕顔の体験―せむ方なく思し怖ぢー)

(a夕顔付きの女房右近の話)夕顔死後、右近は光に夕顔の素性を語る。

「…親たちははや亡せたまひにき。三位中将となん聞こえし。…はかなきものたよりにて、頭中将なん、まだ少将にも  
のしたまひし時見そめたてまつらせたまひて、三年ばかりは心ざしあるさまに通ひたまひしを、去年の秋ごろ、かの右  
の大殿より恐ろしきことの聞こえ参で来しに、もの怖ぢをわりなくしたまひし御心に、せん方なく思し怖ぢて、西の京  
に御乳母住みはべる所になん這ひ隠れたまへりし。それもいと見苦しきに住みわびたまひて、山里に移ろひなんと思し  
たりしを、今年よりは塞がりける方にはべりければ、違ふとて、あやしき所にものしたまひしを(光が見付けた)…(一  
八五〜一八六)」



夕顔が、頭中将との中に生まれた姫君と共に、故父三位中将の邸で暮らして当然であるのに、それができなくなった動機は、正妻四の君の実家（右大臣家）筋から、故三位中将邸に入った脅迫「恐ろしきことの聞こえ参で来し」だという。脅迫の結果、故人とはいえ実の親の家に住み続けることが不可能となって、乳母の家に「這ひ隠れ」なければならぬだけでなく、夕顔を「せん方なく思し怖じ」させたというのは、よほどのことである。

（b）雨夜の品定めでの頭中将の打ち明け（a）に対応するのは、頭中将の、雨夜の品定め体験談（内気な女）の次の部分である。

「…久しくまからざりしころ、この見たまふるわたり（正妻、即ち右大臣の四の君）より、情なく（男女ノ仲トイウモノヲ全ク理解シナイ）うたてある（度ノ過ギタ）ことをさるたより（然ルベク頼リニナル人）ありてかすめ言はせたり（ソノ人カラ夕顔ニ直接宣告サセタノデ）ける（実ハアッタ）、後にこそ聞きはべりしか（頭中将は事後承託させられた）。（尋木八一〜八二）」

（c）夕顔の体験）脅迫の中樞をなすのは、bの「さるたよりありてかすめ言はせたりける」の中身である。文書など言葉で脅すのではあるまい。某院での現場の状況から推測すれば、それに類する実力行使的な脅し、夕顔を生かしておけない、見付け次第命を奪うと、故三位中将の邸に乗り込み、現実に夕顔に襲いかかって脅す、そういう事件があったのではないか。その場に居合わせ、事件を目撃し、夕顔を救ったのが、夕顔の乳母であったと見る。その時の脅迫者は女だった。夕顔も乳母もその女が記憶に焼き付いて当然である。以後、夕顔は行方不明に撤し、「かの右の大殿」筋の追跡をかわさなければならなかった。乳母は後に筑紫へ下り問題の夕顔の夢を見た。

夕顔を実力行使で脅した女を、誰と断定はできないが、右大臣家筋のそれなりの女性であったのは動くまい。右大臣の北の方を物語は語らない。

加害者が誰にせよ、体で感じたその脅迫の恐ろしさが、夕顔を「もの怖ぢをわりなくしたまひし御心に、せん方なく思し怖ぢて」という心理状態に追いやるのは当然に過ぎることである。

思うに、某院で、光の「御枕上」に座った「いとをかしげなる女」とは、夕顔の命を狙えとの、右大臣側のさる筋からの依頼もしくは命令によって動いた、「さるたより（頼れる人即ち殺し屋）」ではなかったか。世はまさに末世である。

〔付4〕（夕顔死後なお夕顔に添う女）夕顔に「添う」「同じさまなる女」は、夕顔死後、光・乳母それぞれの夢に、なお夕顔に寄り添って現われた。これは、死者夕顔が自分の殺害者を封じて離さないことを意味する。

「同じさまなる女」に対する光の意識であるが、女は光に、廃院に住む物の怪と信じさせ、自分の正体を隠すのに成功した。相当の腕の持ち主である。光は「太刀を引き抜きてうち置（一六四）」いたのも、隨身に弦打ちさせたのも忘れていかのようであるが、ことの全責任が自分にあると決めているだけに、女の言葉を全面的に信用し、「荒れたりし所に棲みけんもの我に見入れけんたより」と結論付けて終わっている。光の育ちのよさが、夕顔の置かれた劣悪非道な現実を光に想像させもしない。

某院に連れ出された夕顔は、光を信頼しているのだから、身の危険の予感を打ち明ければ、最悪の事態は回避できたかもしれないが、「世の人に似ずものづつみをしたまひて、人にも思ふ気色を見えんを恥づかしきものにしたまひて、つれなくのみもてなして：（一八六）」という人柄が、それをさせないで終わった。

一方、事件の翌年か、夫に従って筑紫へ下った夕顔の乳母は、

〔夕顔が〕夢などに、いとたまさかに見えたまふ時などもあり。同じさまなる女など添ひたまうて見えたまへば、なごり心地あしく、なやみなどしければ、なほ世に亡くなりたまひにけるなめり、と思ひなるもいみじくのみなむ。（玉鬘九

と、夕顔の死を信じる。「同じさまなる女など添ひたまうて」とは、前述したが、故三位中将邸で、夕顔が問題の女から脅迫された時、乳母が現場に同席し、脅迫をまざまざと見たと採れば辻褄が合う。乳母の意識では「同じさまなる女など（夕顔に）添ひたまうて」夢に現われれば、即ち夕顔の死の報せとされている。今一つ、乳母の夢の語りには「女など添ひたまうて」と「など」と敬語「たまう」とがある。「など」の中身が何か。夕顔四十九日の翌日、光の夢に夕顔が現われたということは、当時の常識としては、夕顔が往生できず、死後なお光を求めていることを意味する。夕顔が死後なお救いを求めて離さない人を伴って乳母の夢に現われたとすれば、「など」の中身は男君（光）であり、乳母はそれなりの身分の方と見て「たまうて」としたと見做せる。

光に戻れば、四十九日の法要の翌日夢に現われた夕顔を救う、即ち夕顔の鎮魂への道は、遺児玉鬘を光が保護し幸せにする以外にない。玉鬘十帖への展開が必須となる。

光の夕顔殺害者の解釈は光流のそれであるのに対し、乳母の夢の解釈こそが夕顔の現実を語るものであり、玉鬘巻の上掲本文こそが夕顔殺害者の種証しであると見なければならぬ。

〔付5〕（夕顔の生き方―刹那を生きる女）源氏物語成立の歴史的背景は、一〇五二年の末世突入と切り離せない。半世紀足らずの内に、太陽も月も地に落ち、世は闇になると信じられていた。（一〇五二年以降の生存者は、「世は末世といへども日月未だ地に落ちたまはず」とうそぶけたが、それに至る寸前に生きた人間の意識・感覚・感情は、想像を絶する。）そういう、歴史上一回性の、極めて特殊な状況下で、末世接近の現実には真剣に取り組んだ一人の女性の精神の所産が源氏物語である。

規範とすべきムカシなど求めようにも求めることはできない。「いづれの御時にか」としか語り出せない危機感・絶望の中で、ニヒルに撒して、源氏物語は、陰惨そのものの現実世界を冷徹に凝視する。男性と違い女性には往生できる保障も

ない。男性に勝る漢学の学力を自認する彼女は、それだけに、男性に対して厳しく、為政者の愚劣ぶり・男のいい気な甘さ・見にくさを容赦なく描きぬいた。人間の愚かさ・捨身の厳しさ・忍耐強さ・悲しさ、その中での人間のまことと美しさが冷徹に厳しく描かれる。

そういう末世の物語世界の中で、刹那を大切に生きたのが夕顔である。三位中将の姫君に生まれ、両親の死後、頭中将に愛されて一女を儲けながら、女房恐怖症の男に捨てられ、正妻筋から、「生かしておけない、見付け次第、こうして殺す」と宣告並びに脅迫を受け、五条の下品下生の家に隠れていた夕顔は、相手を光と見当をつけて交渉に応じながら、素性も、現状の非道さ・苦しさも、自分の一切を語らず、光に救いを求めもせず、ためらいながらも光に従って出掛けた某院で、夕顔の命を狙っている女に見付けられ、宣告通りに殺された。残酷な運命に逆らわず、一切を語らず、救いを求めもしない。全てを捨て、語らないことによって一瞬一瞬の自分の精神の高さを保ち、「いとあさましくやはらかにおほどきて（夕顔一五三）」という夕顔に、光は引付けられた。運命にすべてを任せ、捨てきって、求めず、刹那に生きた夕顔の生き方は、これからというところで、見つかかり絶命したが、それも含めて、末世に向う当該の時期に、無に撤しきった、その意味で、最高の生き方として語られているのではなからうか。（従来しばしば言われてきた「遊女性」<sup>△</sup>という語は、夕顔に対しては、甘えとゆとりが濃厚にすぎる嫌がある。）

〔注〕

(1) 望月郁子「帚木・空蟬両巻における光源氏の体験」二松学舎大学人文論叢第76輯と、一体をなす論である。

(2) 小学館 新編日本古典文学全集『源氏物語1』一六九頁頭注一八

(3) ここで光の意識に六条がのぼるのを、夕顔を殺した「をかしげなる女」が六条ではないかと、ゴシップ好きの読者に疑わせかねないが、桐壺帝に続いて六条が源氏の意識に出てくるのは、光の六条邸への出入りが光個人の六条への興味によるものではない

く、父帝の依頼による宿直的なものであることを示唆すると見る。夕顔巻における六条と光との関わりを一通り挙げ、これを確かめておく。

「六条わたりの御忍び歩きのところ（夕顔一三五）」

「御心ざしの所には、木立、前裁などなべての所に似ず（造園のセンスが抜群で）、いとどのどかに（故人の旧邸らしく、公人の出入りもなく）心にくく住みなしたまへり。うちとけぬ御ありさまなどの気色ことなるに、ありつる垣根思ほし出でらるべくもあらずかし（世間の目で、六条の夕顔に対する絶対的優位を強調）。つとめて、すこし寝すぐしたまひて、日さし出るほどに出でたまふ。朝明の姿は、げに、人のめできこえんもことわりなる御さまなりけり。（光の六条通いは、未亡人対象の忍びの通いではない。故人の為の遺族訪問・宿直を目的としたものであり、暁に帰るべきものではない。）（一四二）」

「秋にもなりぬ。人やりならず心づくしに思し乱るることどもありて、大殿には絶え間おきつつ恨めしくのみ思いきこえたまへり。」

六条わたりのも、とけがたかりし御気色をおもむけきこえたまひて後、ひき返しなめならんはいとほしかし。：女は、いとものをあまりなるまで思ししめたる御心ざまにて、齡のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜離れの寝ざめ寝ざめ、思ししほることいとさまざまなり。

霧のいと深き朝、いたくそそのかされたまひて、ねぶたげなる気色にうちなげきて（光はゆっくり寝かしてもらいたいのが本音）出でたまふを、（女房中将が案内して見送る。歌のやりとりがあるが、光の歌は六条宛てではない）。：なつかしき御気色を見たてまつる人の、すこしものの心思ひ知るは、いかがおろかに思ひきこえん、（六条の宮の人々の意識では）明け暮れうちつけてしもおはせぬを心もとなきことに（六条の宮を光が最も落ち着けるところとして、いつでもおいでて下さるようになつて頂きたいと）思ふべかめり。（一四六～一四九）」

「内裏にいかにも求めさせたまふらんを、いづこに尋ぬらんと思しやりて、かつはあやしの心や、六条わたりにいかに思ひ乱れたまふらん、恨みられんに苦しうことわりなりと、いとほしき筋はまづ思ひきこえたまふ。（一六三）」

八月十五夜に続く今宵も宮中では管弦宴があり、父帝が光を求められるのは明らかである。光は、まずは帝のおそば仕えが、ついで六条宮への奉仕が意識にのぼる。六条宮人の光への期待の裏には、帝の内意―前坊没後、六条御息所に（内裏住み）を勧めたが、彼女は従わなかった。桐壺帝にすれば、故宮の遺族を守る、即ち皇統の血を守る上で頼れるのは、光以外に無かった。

そこで光の「六条わたりの御忍び歩き」が始まった―があったと見る。

(4) 注(1)の論文の一

(5) 藤井貞和「夕顔の女をとり殺したのは死霊」『源氏物語論』岩波書店二〇〇〇年三月

第一節二

「第八章 守護する霊か、怨霊か」の

(二〇〇六年三月二日)